

東奥日報

2025年(令和7年)12月12日(金曜日) (16)

人と車で混雑 八戸市民病院敷地内

救急車の安全通行どう確保

八戸

八戸市立市民病院の敷地内で救急車が安全に

通行できるよう表示を工夫し、迅速な患者受け入れにつなげようと、八戸工業大学の学生約50人がユニバーサルデザインの視点を生かした救急車動線と横断歩道の研究に

取り組んでいる。学生たちは誰が見ても分かりやすい救急車や歩行者の動線を示すデザイン案を検討中で、来年1月中旬に開く発表会で同病院の医師らに提案。病院側は優れたデザインを採用し、敷地内の混雑緩和に役立てたい考え。（千葉真由美）



吉村所長④と横断歩道のデザインについて意見を交わすハ工大生

八工大生、動線デザイン提案へ

研究を進めているのは、工学部工学科の機械工学コース自動車工学プログラム4年生、同科建築・

土木工学コースと感性デザイン学部の2年生。同病院敷地内の横断歩道は救命救急センターに向かう

急救車の通り道にあり、患者搬送中の救急車が歩行者の横断中に一時停止せざるを得ない状況という。病院側から相談を受け、同大が課題解決に協力することになった。病院側は救命救急センター所長らとの顔合わせ会が同大で行われた。今管理者は同病院の年間救急車受け入れ件数が7千件近くあることや、車と人の往来が激しい病院敷地内の現状を説明した。

同自動車工学プログラム4年の藤田蒼也さん（22）は弘前市出身。9月上旬に1週間、日中に同センター付近で実施した人と車の往来に関する実態調査について報告。救急隊や病院利用者の意見も完全に分離。病院入り口に向かう利用者にとって安全かつ最短ルートの構築――といった対策の必要性を提言した。

その後学生たちは5人前後のグループに分かれて意見交換。吉村所長は「病院敷地内は公道じゃないので、横断歩道はどんな色でもいい」と語り、学生たちの柔軟なアイデアに期待を寄せた。藤田さんは「医療と工学の連携で、自分たちが病院の課題解決に協力できるのは光栄」と意欲を見せた。

※「この画像は該当ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」